



図書館だより

第6号 平成14年2月発行
弓削商船高等専門学校図書館



創基百周年記念史料館入口

目次

図書館で好奇心を育てよう	商船学科長 多田 勝	2
自分を教育する	電子機械工学科長 鶴 秀登	2
Reading, Leading!	総合教育科教授 神谷 正彦	3
インターネットと図書	情報工学科長 田原 正信	3
間口を広く	図書館長 山尾 徳雄	4
書の見方・書き方について	学生課実験実習第一係長 東谷益澄美	5
平成13年度読書感想文優秀作		5
平成13年度主要新入図書		6
編集後記		6

図書館で好奇心を育てよう



商船学科長
多田 勝

学生達に無関心、しらけモードが蔓延している現状を何とかして、より積極的に人生に立ち向かって貰いたいと希望しています。

そのひとつの方向として、「好奇心をもて」という言葉は使い古されていますが、死語になってはいないと思います。

ではどのようにすれば、学生達に好奇心を持ってもらうことができるでしょうか。

ある特定の対象への好奇心は、まわりにいる人が努力したから育つ、というものではありません。それよりもわれわれは、学生がなにに興味をもっているか、あるいはなにになら興味をもてそうかを探して、それを入口にするほうがよいのではないかと思います。

たとえば、野球に興味のあるものであれば、無意識のうちいろいろな資料を読んだり、友人と話したりしながら知識を吸収しているものです。そしていつの間にか莫大な資料の中から自分の関心のあるものを選び出し、飽きることなくその世界の知識を吸収しているものです。

このように、本人がおもしろいと思えば、自然に好奇心が芽生えるものだと思います。だから、学生に好奇心について指摘できる立場にあるものにできることは、どうやってそのおもしろさを教えるか、の一言に尽きるのではないのでしょうか。

実験をするときなど、実験をしてみて、いっしょに考えることが大事でしょう。変な結果が出てきても、教師が先に答えを言ってしまうと、いっしょに考えてみよう、と誘い込むように接すると、興味がわくのではないのでしょうか。最初から出来上がった形で教えてしまうと、「そうですか」終わってしまう。どうしても深いところまでは入っていかない。興味が湧いたところで図書館に行って基本的な項目を調べるように導くことができるのではないのでしょうか。

図書館ではそのような場合のために、多様な資料を収集して、時々刻々変化する現代の状況に対応できるように、図書館の充実を図る必要があるでしょう。

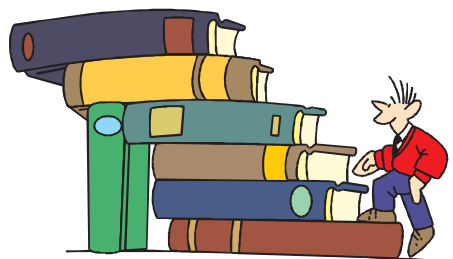
自分を教育する



電子機械工学科長
鶴 秀 登

時間つぶしの図書館利用、娯楽としての図書館利用、資料室としての図書館利用、勉強部屋としての図書館利用等々、図書館の利用の仕方は色々ある。どんな理由でもよい。大いに図書館、そして図書を利用してほしい。単に、電子機械工学科の専門教育を受ける中で、工学専門書を卒業研究の参考文献として利用したり、また工学実験や工作実習の実験報告や課題を行うために工学図書から多くを学んでもらいたい、などと野暮ったいことを言うつもりはない。もう既に、電子機械工学科の学生諸君がこのような図書館の利用法に手慣れていて、疑問に思ったときにどこに属するどのような専門書を調べればよいか、その手だてを知っているからである。ここで言う「図書館そして図書を利用してほしい」には、学業とは別の視点に着目した願いが入っている。

近年、学校教育現場で朝の10分間読書の効果が議論されている。読む力を付け、集中力を養い、想像力や思考力を鍛えるなどその効果が大きく、その過程で遅刻が減り、授業態度が良くなる事などが報告されている。図書館に行くと本と接する機会をもつこと、そして多くの本を読むことでいろんな事を知り、思いやりが育ち、考えることをさせてくれる。これは正に、自分が自分を教育する事になり、広い意味では親や教官が教育する目的でもある。自主性は、放っておいては身に付かないが、強制されて育つものでもない。そこで上述の願いとなるわけである。読む図書は図書館にたくさんある。学校の行き帰り、学校の休み時間に書に触れてほしいと思う。



Reading, Leading!



総合教育科 教授
神谷 正彦

問題は山積みしているのに、どこから手をつけたらいいかわからない、この社会ではよくあることです。

今ここで本校における読書啓蒙について考えてみようと思うのですが、これがそういう問題の一つなのです。ただ、本校の学生を他から切り離して考えるのは少々無理がありますから、若者一般の話として言います。

ひとくちに「若者の活字離れ」とよく言いますが、その原因はというとどうも単純ではないのであって、いつ頃からそれが顕著になったかいろいろ分析されていますがどれもはっきりしません。日本の高度成長がもたらした大消費社会のあたりに起源をもってくるのが一般的ですが、その頃というのは経済成長が急速だっただけではなく、大衆レベルでもどんどん変化が起きていました。情報媒体のマスメディアが発達して、大衆向けの雑誌が増えました。週刊誌から月刊誌まで、淘汰選別が激しい世界ではありませんが今でも本屋さんへ行けば実に何十種類と雑誌が並んでいます。内容も多岐にわたっていて、どういう年代のどういう職業の人達をターゲットにしているかで、中味がずいぶん違ってきます。活字の量だけをみても差が大きいです。自分の生活に必要な情報に合わせて選ぶことができるのですから、わざわざ本を読まなくても雑誌だけで十分、という人も出てきます。その人にとっては、それが効率のいい、つまり時間的にもコスト・パフォーマンスの上でも理にかなったやり方なのです。

今、効率と言いましたが、実は国語教育の中にもそれが入り込んでしまったのです。受験戦争、もう懐かしい言葉になりましたが、この時代くらい効率的学習が重要だった時はありませんでした。何しろ受験科目は多いし、時間は限られているしで、国語に関していえばのんびり字の書き方や作文指導やら、やっている暇がありません。点を取るための教育が優先されてきたこと、私自身もその洗礼を受けたわけですが、これはもうはっきり言って国語教育の墮落です。そのことによりやく気がついてさまざまな見直しが進められているのです。

牛に引かれて善光寺参り、ではないですがたとえレポートを書くために本を読む、というような受け身の読書でもかまわないと思います。最初はそうでも、次は興味の湧いた本に向かってください。図書館にはみなさんに読んでもらうのを待っている本がきっとあります。どうか手に取って自分の世界を広げてみてください。

インターネットと図書



情報工学科長
田原 正信

情報工学科の学生の図書館利用率は、他学科の学生に較べて低いと聞いています。その原因は何でしょうか。一つにはインターネットの利用があると思います。我々教官でも、つい、ネットで調べものをしてしまいます。ネットで検索する方が、本を調べるよりも早く情報が手に入るからです。しかも、最新の情報が入手できます。情報工学科には、学科専用のパソコンが何時でも利用できるようになってきているので、遠い所にある図書館に行かなくても、手近なパソコンに頼ってしまう気持ちは理解できます。確かにネットでは、新刊本の紹介まであります。では、ネットがあれば、本は必要ないのでしょうか。ネット上には情報があふれています。しかし、その情報は断片的であったり、単なる紹介情報であったりします。そんな情報の洪水の中から、系統立てて物事を考えるのは、難しいことです。断片的な情報は手近であり、その場しのぎには便利ですが、きちんとした考えを身につけるには充分ではありません。本を読むには、時間も掛かり、頭も使わなくてはならないのですが、そうして身につけた知識や考え方は、必ず君たちの将来に役立ちます。学術的な解説は勿論のこと、文学や芸術に関する系統だった情報を手に入れるには、本に依るしかありません。ネットでは決して得られないことのない知識や教養が、図書館にはあります。是非、図書館に行ってお本を読んで下さい。



問口を広く



図書館長

山尾 徳雄

図書館という名がついていてもその規模は、大小様々です。大は、国会図書館のような大規模なものから小は、地域の図書館まで大変な違いがあります。利用者の立場から言えば、一般的に大きい図書館に行く程自分の求める資料が手に入りやすくなるであろうと期待します。しかし、大きな図書館に行けば必ず欲しい資料が手に入るかといえば、必ずしもそうであるとは限りません。社会に溢れている情報の種類は多岐に渡っており、大きな図書館といえどもそれら全てを網羅することは困難です。また地域的な関係で、大きな図書館に出かけて行くことが難しい場合もあります。資料を探すに当たって、多くの場合にインターネットなどを利用して求める資料の所在をさがした上で当該収蔵施設に行って閲覧し、あるいは借用し、またはその資料のコピー送付を依頼するといった作業が必要です。このことを逆方向から考えれば、ネットワークを持ってさえいれば、本校のような小規模な図書館でも十分に活用できる事になります。

しかし、資料入手方法の前に考えなければならないもっと重要な事は、自分が求めている資料は何かという問題です。探すものがなければ方法は意味がありません。何かある事について研究する、研究とまではいなくても知りたいとか、調べてみたいとか思う気持ちがなければ、必要な資料は決まりません。そのような状況では、どんな大きな図書館も何の役にも立ちません。

図書館を有効に活用するには、まず知的好奇心を持つ事が必要です。対象は何でもいいでしょう。自分の普段の生活、授業、新聞、テレビ、友人との会話で気になった、関心、興味を持った事柄を少しだけ深く知ろうとする、これが出発点です。この段階で役に立つのが身近な図書館です。図書館所蔵の本を閲覧室で読んだり、借り出したり、もし適当な本がなければその分野についての入門書等の購入の申し込みをする

ことも出来ます。

これによって自分が興味を持っている事柄をより深く調べるにはどのような方向へ進めば良いかという事が分かってくると思います。あまり深い知識までは必要がないのであれば、入門書で事足りるかも知れません。こうして関連資料を見て必要な事を理解したり、自分の専門分野については手がかりとなった資料から芋づる式に資料を探していっているんなどころから資料を集め、より深い知識を得る事が可能となります。そのような作業を日常生活の中で少し増やしていったらどうでしょうか。自分の専門とすべく限られた範囲の問題の研究に忙しくて、それ以外の分野には全く手が回らないという人もいるかも知れません。しかし、自分の専門外の事についても社会一般に関わることはある程度は知っておくのがいいのではないのでしょうか。新しい発想は、自分の専門外の勉強から湧いてくるとい話も聞かれます。いろんな発想ができる人物になり、さらに、最近よく言われている創造性を身につけるためにもいろんな事に関心を持ち、積極的に図書館を利用して見識を高めていってほしいと思います。



平成13年度主要新入図書

書名	著編者名	書名	著編者名
ワード・ポリティクス	田中 明彦	水軍の城	白石 一郎
餓死した英霊たち	藤原 彰	脳の中の能舞台	多田 富雄
文学夜話 作家が語る作家	日本ペンクラブ	近世 今治物語	大成 経凡
龍馬(一)青雲篇(二)脱藩篇(三)海軍篇	津本 陽	正法眼蔵の世界	石井 恭二
風の良寛	中野 孝次	日本・日本語・日本人	大野 晋外
自衛隊「影の部隊」	山本 舜勝	わたし、ガンです ある精神科医の耐病記	頼藤 和寛
私の歩んだ道	白川 英樹	「私が、答えます」動物行動学でギモン解決!	竹内久美子
花あらし	阿刀田 高	中坊公平・私の事件簿	中坊 公平
歴史をあるく、文学をゆく	半藤 一利	関西の新実力者たち	後藤 正治
姫椿	浅田 次郎	オランダ東インド会社	永積 昭
思うままに	梅原 猛	日本人はるかな旅 第1巻~第3巻	
学級崩壊・授業困難はこうして乗り越える	金子 保	個人と国家	樋口 陽一
日本冒険(上)(下)	梅原 猛	シャトウ ルージュ	渡辺 淳一
悲運の遣唐僧	佐伯 有清	アメリカの経済支配者たち	広瀬 隆
現代を生きる	梅原 猛	国境	黒川 博行
日本の軍事システム 自衛隊装備の問題点	江畑 謙介	阪神タイガースの正体	井上 章一
ハンニバル アルプス越えの謎を解く	ジョン・ブレヴァス	鬼子	新堂 冬樹
歩兵の本領	浅田 次郎	自立のスタイルブック	共同通信社経済部
タイタン(上)(下)	ロン・チャーナウ	漂流物	車谷 長吉
Number ベスト・セレクション	スポーツ・グラフィックナンバー	白痴群	車谷 長吉
暗殺・伊藤博文	上垣外憲一	やがて中国の崩壊がはじまる	ゴードン・チャン
奇貨居くべし 天命篇	宮城谷昌光	そうだったのか!現代史	池上 彰
少年事件の実名報道は許されないのか	松井 茂記	宇宙 未知への大紀行(1)~(3)	NHK「宇宙」プロジェクト
「復活」十の不死鳥伝説	後藤 正治	ホタル帰る	赤羽 礼子・石井 宏
戦争の世界史	A・L・サッチャー	世界を動かしたユダヤ人100人	マイケル・シャピロ
涙	乃南 アサ	ということ聞けよ、パソコン!	奥 和宏
産経抄	石井 英夫	政治家やめます。	小林 照幸
首相列伝	宇治 敏彦	故宮奪還	横山 信義
カルトの子	米本 和広	マリア・プロジェクト	榎 周平
日本の戦争責任(上)(下)	若槻 泰雄	断絶の世紀 証言の時代	徐 京植・高橋 哲哉
秘事	河野多恵子	中村修二の反乱	畠山けんじ
岳飛伝(一)~(四)	田中 芳樹	戦争と罪責	野田 正彰
陽気なイエスタデイ	阿刀田 高	戦後民主主義のリハビリテーション	大塚 英志
東京の窓から日本を	石原慎太郎	ふつうのファッション	大田垣 晴子
憲法改革	芹川 洋一	王妃の館 上・下	浅田 次郎
時の渚	笹本 稜平	日本国憲法の逆襲	佐高 信
世界の環境危機地帯を往く	マーク・ハーツガード	日本史再検討1・3	井沢 元彦
未確認家族	戸梶 圭太	きのうの空	志水 辰夫
小説 大逆事件	佐木 隆三	ダーク・ムーン	馳 星周
審査せず 溶解する損保	伊野上裕伸	怒りのブレイクスルー	中村 修二
仁淀川	宮尾登美子	楠田實日記-佐藤栄作総理首席秘書官の2000日	楠田 實
コーヒー党奇談	阿刀田 高	赤の発見 青の発見	西澤 潤一・中村 修二
いまを生きる	加島 祥造	天を衝く(上)(下)	高橋 克彦

編集後記

今年こそ図書館だよりを年内に出せようと思っていましたが、残念ながら原稿の提出が遅れ、年が明け、年度内の発行が危ういギリギリの発行になりました。

平成13年は、弓削商船高等専門学校創基百周年に当たる年でした。数々の記念事業が行われ、図書館の関係でも史料館が設置されました。

ほとんどの学生は知っていると思いますが、図書館に入って向かって右側が史料館です。普段は入り口にカギがかかっていますので、入館する時には、図書係の人にカギを開けてもらって下さい。ここにはかつて創立50周年記念館に納められていたいろんな資料や各学科の展示物、しまなみ関係、塩の荘園弓削島荘関係、村上水軍関係の資料が、数は多くありませんが、納められています。その中には、今回寄贈された本校設立の功労者、田坂初太郎氏の銅像、田坂初太郎氏、初代校長小林善四郎氏、小山亮氏、坪内寿夫氏ら各時代の功労者の略歴パネル、村上水軍第36代目の当主村上公一氏から贈られた小早川秀秋から村上水軍に送られた豊臣秀吉の朱印入りの手紙の複製などがあります。この手紙は、豊臣秀吉が権力を握った頃のもので、この時期能島村上家は、敵対したとの理由で秀吉からひどく憎まれていたという通説を覆す可能性のあるものです。また、弓削町から借用している百合文書のコピーのパネル等も含まれていますが、百合文書というのは、京都の東寺(教王護国寺)に伝わってきた中世荘園に関する極めて貴重な資料です。その他にしまなみ海道沿いの市町村の市町村誌、広報等も収納しています。本校開校当時の古い写真とあわせて一度見学して下さい。